

北奥方言の変化段階に見られる狭母音音節の諸相

— 高年話者の複数発音をもとに —

大橋 純一

Various Aspects of Close Vowel Syllables in the Stages of Change in the Hokuo Dialect: Using the Multiple Pronunciations of Elderly Speakers

OHASHI, Junichi

Abstract

In the past, the /-i/ /-u/ of the Hokuo dialect became a central or low vowel, and its appearance, where it is unified with /-i/, has been focused on as one of the dialect's distinctive characteristics in terms of speech sounds. However, concerning said dialect, when studying this phenomenon with a large number of people, variety emerges even in the same generation, and it is difficult to collectively state that the characteristic belongs to just one generation. Regarding the various aspects of the Hokuo dialect's /-i/ /-u/ in the decline process, this paper aims to investigate the current characteristics in a comparative manner by providing a framework beforehand of the stages of change seen and the nature thereof—using previous studies as references—and analyzing the multiple pronunciations of utterances that have been classified into each stage. In relation to the current situation of dialects that feature complex aspects, the above can also be considered a new endeavor associated with the method of understanding collected data, or the procedure of analyzing said data, to ascertain the essence of what occurs in such situations.

Key Words: Close Vowel Syllables, The Stages of Change Framework, The Multiple Pronunciations, Upper/Lower/Front/Back Tongue, Relationship of Each with Articulation Distance

キーワード: 狭母音音節, 変化段階の枠組み, 複数発音, 舌の高低・前後, 調音の距離関係

はじめに

本稿は、衰退過程にある北奥方言の狭母音音節（いわゆるジージー弁）の諸相について、ひとつは既調査を参考に変化段階の区分を事前に設けることで、またもうひとつはその各段階者の複数の発音を分析することで、現状の特徴を手順を踏みつつ、対比的に見ることを目的とする。「複数の発音」とは、ここでは“同じ語を何度も発音”という意味が主体であるが、“異なる語を発音（その結果何度も）”という意味も含意する。後者で見た場合、結果として音環境による現れ方の違いに言及することになる。

当該方言で今、この現象を多人数調査すると、同じ世代（たとえばもっとも方言的であることが期待される高年層）でもさまざまに現れ、特徴をどれかひとつに集約して言い当てるのが難しい。一言で言えば変化の過渡的段階にあり、衰退が著しく、よって個人差が大きいということになる。すると、言い方は悪いが、調査すれば

した分だけ“いろいろに現れる”ことがより鮮明化するばかりであり、そうとしか言いようがない事態を甘んじて受け入れざるをえないことになる。対して本稿は、むしろその“いろいろに現れる”事態をまずは /-i/ と /-u/ の現れ方をもとにおおよその性質分けをし、各々が複数の発音でどのような実相を呈するかという点から現状の特徴を把握しようとする。その点では、収集データの捉え方、またはその分析手順に関する新しい試みということも言える。

これに先立ち、筆者は大橋（2020）において、北奥方言（秋田方言）に現在みとめられる /si/ と /su/ の実相のバリエーションについて、高年女性 22 名を対象とする比較により、また舌調音（前後・高低）と口唇形状（円唇・非円唇）との構造的分析により、考察を行っている。本稿では、そこで特徴別に分類して得られた変化段階の枠組みを援用しつつ、それぞれに該当する代表者の実態を、上記の観点により比較して見ていくことにする。^{注1}

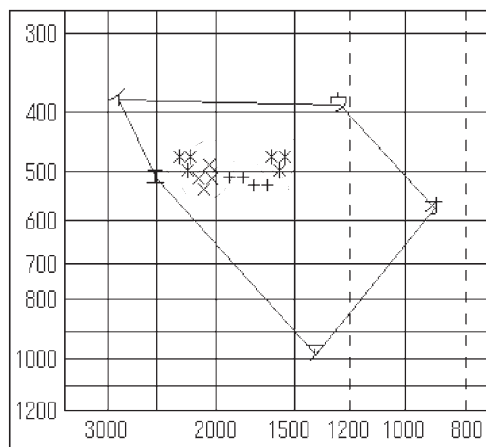
1. 調査および分析の手順

上で述べたとおり、以下には大橋（2020）で扱ったのと同じ高年女性を対象とし、各発音の対比的な考察を行う。^{注2} 先の分析では特定の回の発音を問題にしたものを、^{注3} ここでは複数回の発音（その安定または揺れの様相）を見る視点から考察を深めようとする。ただし、前稿では舌調音と口唇形状から実態を捉え、それぞれ前者をF1-F2図、後者を口唇画像として見たが、ここでは基本、舌調音の方を図示し、その発音ごとの変動の有無、変動があればそのあり方などを中心に検討を行う。^{注4} 口唇の方は複数回の画像を、しかも1回ごとに当然現れうる程度差のようなものをその都度図示するのは現実的ではなく、かつあまり意味があるものとも思われない。よって各口形のおおよその現れ方を言及するにとどめ、発音を違えて形状がその都度大きく異なって現れるものに限り、図示することにする。

次に、これも既述したとおり、本稿では大橋（2020）で整理した変化段階の枠組みを援用し、各段階者の複数の発音を問題にしようとする。その枠組みであるが、前稿では上記の構造的分析により、次の変化段階をみとめている。

- | | |
|---------|------------------------------------|
| I - 1. | /si/ /su/ とともにイ寄りの低母音：非円唇 |
| I - 2. | /si/ /su/ とともにウ寄りの低母音：非円唇* |
| II - 1. | /si/ /su/ とともに中間寄り（ただし非合一）の低母音：非円唇 |
| II - 2. | /si/ がイ寄り・/su/ がウ寄りの低母音：非円唇 |
| II - 3. | /si/ がイ寄り・/su/ がウ寄りの低母音：円唇 |

大橋（2020）による「変化段階の枠組み」



再掲：図6 舌調音・口唇の構造的分析から見た /si/ /su/ の段階的諸相

このうち、I - 2は1名がこれに該当するが、話者本人の知識（しかも正確ではないそれ）が理解語的にそうさせている側面が強く、他とは異質の性格のものを受け取れた。要は話者本人において /si/ と /su/ の区別がまず明瞭である一方、^{注5} 「昔の人の発音は」といった体で解説調に、そしてまた自身がイメージしているであろう方言色を誇張して回答していると思われたものである。よって前稿では、また本稿でも以下、I - 2を対象から外して枠組みを捉えている。それを図示したもの（大橋2020、図6）を、イメージの一助として再掲する。

左図の「F1-F2図」には、I - 1～II - 3の段階に即して、各々 /si/ と /su/ の分布範囲と想定できる位置を、右図の「舌調音」に記す×・+・*をプロットして示している。また右図の「口唇」に関しては、形状から3種のもののみとめ、円唇を円形状に、非円唇を棒線状と楕円形状にそれぞれ見立てて図示している。^{注6} これによれば、当方言の現状からは、おおよそ次のことが読み取れる。

- ・大きく /si/ と /su/ を区別しない I の段階と区別する II の段階とが分別される
- ・I では舌調音の横の関係でイ寄りの合一化が見られる
- ・II では舌調音の横の関係でイとウの距離に段階差がある
- ・他方、縦の関係で I と II に大差はなく、いずれも基準値より下方向（低母音）に現れる
- ・口唇は程度差はあってもほぼ非円唇に現れるが、II の一部に円唇に現れるものがある

つまり、個々に見れば複雑に感じられる /si/ と /su/ の諸相も、序列化すれば I - 1～II - 3のいずれかに当てはまりうること、また当方言に特徴的なこととして、口唇形状および舌調音の横の関係にはバリエーションがあるが、縦の関係にはそれがあまりない（一律に低母音で

段階	舌調音		口唇	
	/si/	/su/	/si/	/su/
I - 1	× ×	—	—	—
II - 1	+ +	—	○	—
II - 2	—	—	—	○
II - 3	* *	—	—	○

ある)ことが指摘される。以下、その各段階者の複数の発音がどのように現れるかを具体的に見ていく。

2. 分析対象

分析にあたり、話者はⅠ-1およびⅡ-1・2より各1名、Ⅱ-3より2名、計5名を対象とする。いずれも大橋(2020)で各変化段階の代表者として舌調音および口形画像を例示したものである。後注の2にも記したが、大橋(2020)では各々複数の発音を得ている中のどれを分析対象とすべきか、そのこと自体に議論の余地があるとしながらも、回答状況からいずれか1つを選定し、分析を行っている。本稿では、それと同じ話者を対象に、前稿に用いた1回を含め、得られた発音のすべてについて分析・比較を行う。

分析は、四・酢、梨・茄子、獅子・寿司・煤のミニマルペア7語について行う。これも後注の2に記したとおり、対象とする7語に関しては、最初に謎々式により2～3回、本人の内省に基づく発音を介して、さらに複数回の発音を得ている。語により求める発音数は一定ではなく、かつ分析不可のもの(無声化や疑問調の発音など)やフォルマントで異常値を示すものは除外したため、その数は話者により前後している。結論として、ここでいう「複数発音」の総数は、1人46～56回ということになる。

3. 各変化段階における複数発音の実相

以下には、各代表者について、抽出しえた /si/ と /su/ の発音すべてのフォルマント値を F1-F2 図にプロットし、それぞれの現れ方を対比的に見る。^{註7} 各々がどの調査語の発音であるかはひとまず特定せず、一律に /si/ に相当するものを「・」、/su/ に相当するものを「×」

の記号で示す。その場合、当現象にとって不要な周波数情報(F1:300Hz以下、F2:800Hz以下)は便宜的にトリミングして図示する。また参考として、図の左部には /si/ と /su/ の発音数およびその平均値を記す。大橋(2020)ほかでも詳述しているとおり、F1-F2 図は、縦・横軸(F1・F2)の交点により舌調音の位置を特定するものであり、前者はおおよそ舌の高低、後者は前後の関係を測る指標となる。^{註8} このことから、以下は成人女性の平均と見なす図中のイ～ウ(今石元久1997より)に対して、各代表者の回数分の /si/ と /su/ の調音がそれぞれどのような距離関係にあるかを視覚的に対比していく試みとなる。

3.1 Ⅰ-1

Ⅰ-1は、1節に記す「変化段階の枠組み」に「/si/ /su/ とともにイ寄りの低母音：非円唇」とある。変化序列も最上位に位置することから、当方言の現状の中ではもっともそれらしい段階者と想定できるものである。図1によれば、その想定に違わず、・と×の記号はF1が500Hz、F2が2000Hz付近で重なり合い、/si/ と /su/ に区別が存しないことはもとより、50近い発音すべてがイ寄りの類似する位置にあることがわかる(F1平均:510Hz、F2平均:2050Hz前後)。調査時の話者の応答ぶりも、調査者からの誘導を待つまでもなく図の・や×が一様に回答され、その点では大橋(2017)の分類でいう「A. 典型レベル：求めると同時に方言音声は回答される話者(基本的にそうとしか発音できない話者)」(p.22)に相当するものと解される。また口形も /si/ /su/ を問わず同じ平唇状に現れることが特徴であり、どの発音を切り取っても、該当する語や音節、それによる形状の違いを探り当てることの方が難しい(大橋2020に掲載の口形画像を参照)。当話者は本調査における最高齢者で、生来現住地から移動したことの無い生粋の方言話

音節	発音数	平均		
		F1	F2	
/si/	24	46	507	2059
/su/	22		507	2047

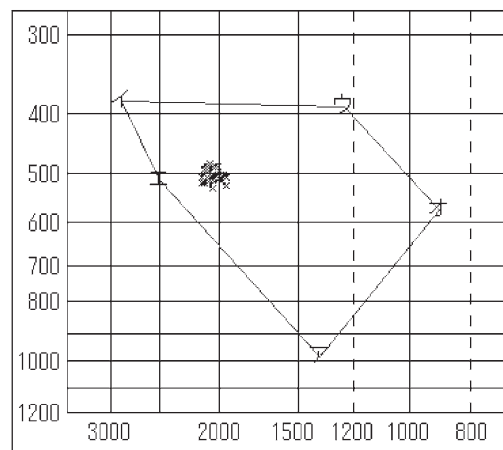


図1 Ⅰ-1

者である。従来、北奥方言について言われてきた「[地図]「知事」「辻」(姓)は [tsi~dzi] に、「獅子」「煤」「鮭」は [sisi] に、また、「父」「乳」「土」は [tsitsi] に聞きなされる」(佐藤稔 1984, p.282) や、「<梨><茄子>を「ナシ」, <寿司><煤>を「シシ」, <地図><辻>を「チジ」に近く発音する地域・・・は北奥」(秋田県教育委員会編 2000, p.8) という特質は、まさにこのような状況を捉えて言っていたのであろう。それはまた、加藤(1984)が「シとスなどの区別」の項で「秋田方言ではこれらを si, ci, zi と認め、su, cu, zu の拍が欠けているとみなす」(p.91) と説明しているような、いわゆる音韻論的な“拍の欠如”を背景として生じている現象と解せるものとも言える。

3.2 II - 1

II - 1 は、上記では「/si/ /su/ とともに中間寄り(ただし非合一)の低母音:非円唇」とされている。「ともにイ寄りの低母音」であった前段階とは区別の有無という点でも、その実相という点でも相違するが、実質 I - 1 の次段階であることを念頭に置けば、また両音節が中舌・低母音化して近接する関係にあることからすれば、前段階に準じて方言的な特色を色濃く残す段階者であることが想定される。その観点により図2を見ると、図1(I - 1)とは・と×の全般的な分布範囲こそ異なるものの、各々が狭い範囲で重なり合い、発音ごとの実相にさしたる相違がないことが明瞭である。つまり当話者の /si/ と /su/ は、それに相当する・の F1 が 500Hz, F2 が 1900Hz 付近、×の F1 が 500Hz, F2 が 1700Hz 付近に一定的に現れ、実相上の大きな揺れがないことをみとめうる(平均値は図2を参照)。^{註9}

しかし一方、その中であって・が重なり合う領域に時折×が、逆に×が重なり合う領域に・が散見され、I - 1 には見られなかった /si/ と /su/ の逆転があることが注

意される。これは特に /si/ /su/ が連音となる獅子・寿司・煤のミニマルペアにおいて見られがちであり、たとえば獅子と煤が [süsü], 寿司が [süsü] になったりと、多くの場合、前後どちらかの音節が反転して現れることによって生じている。当人の回答状況を見るに、全体に /si/ と /su/ は発音しにくく、特にこの2つの音が連続する場合には紛れやすい傾向がうかがえた。既述のとおり、当話者は序列最上位の I - 1 の次段階にあり、「イ寄りの低母音で合一化」していたものが「中間寄り(非合一)」へと移行しつつある(つまり変化初期にはあるものの、当方言にとっては I ~ II への大きな転換点に立つ)段階者と見うるものである。自らもこの発音が「苦手、区別がはっきりしない」と内省していることからすると、上記は多様に、または無分別に生じている揺れというよりは、むしろそうした過渡的段階にあるがための混同と見るのが妥当かと思われる。

なお同話者の口形であるが、再掲の図6からも見て取れるように、I - 1 よりは口唇の緊張がはるかに緩く、棒状に例えた I - 1 に比べれば、まさに楕円形状に見立てることが適当と言えるものである。いずれにせよ、/si/ /su/ とともに非円唇で揺れはなく、かつ視認の範囲でその2つに形状の違いを明確に読み取ることは困難である(大橋 2020 に掲載の口形画像を参照)。この点からしても、当話者が「中間寄り(非合一)」を示す変化の1段階として、他段階とは紛れない、一定的な実相を呈する状況にあることがうかがえる。

3.3 II - 2

II - 2 は、上記には「/si/ がイ寄り・/su/ がウ寄りの低母音:非円唇」とある。つまり II - 1 で「中間寄り(非合一)」となって現れたものが、非合一の度合いを明確化しつつ、特に舌調音の横の関係でもう一段、隔たりを大きくした段階者と想定できるものである。その視点で

音節	発音数		平均	
			F1	F2
/si/	27	52	506	1881
/su/	25		507	1738

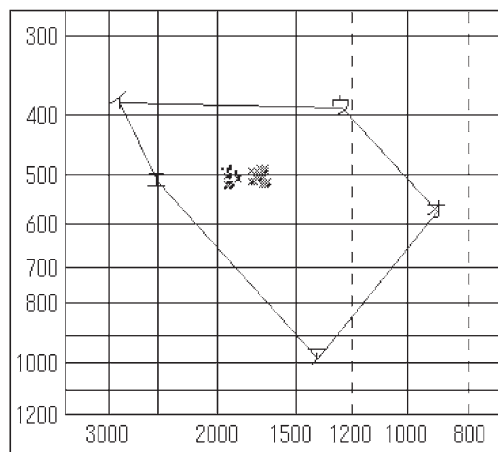


図2 II - 1

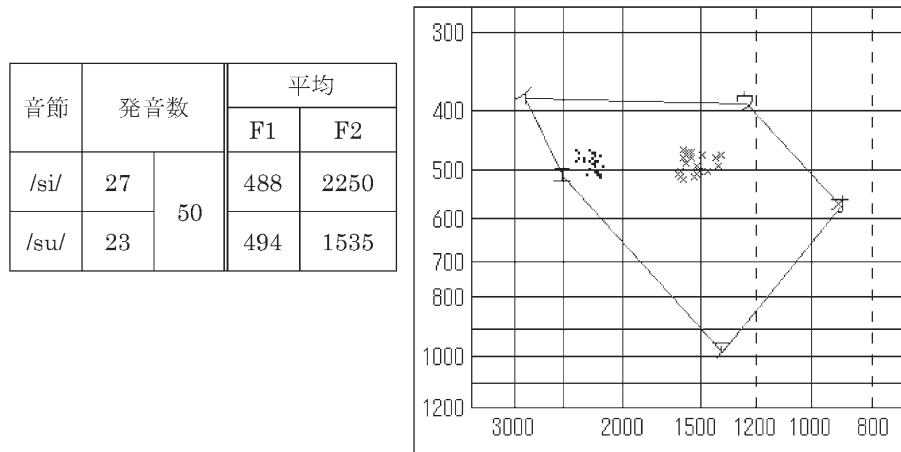


図3 II - 2

図3を見ると、確かに・と×が上記でいう「/si/がイ寄り・/su/がウ寄り」の分散状況を示しており、当段階がII - 1に次いで区別の度合いを、そしてまた実相自体の相違を明確化しつつあることを印象づける。しかし一方、・および×の重なり具合は前段階のII - 1またはI - 1のような整然と束をなすものとは見がたく、むしろ部分的にばらつきが見られ、発音ごとのバリエーションが一定程度あることがうかがえる。たとえば・(/si/)に関して見てみると、F2ではおよそ2200Hzを示すものがあれば2400Hzを示すものもあり、その差約200Hzの分布幅がある。F1でも同様、およそ470～510Hzの分布幅がある。それは×(/su/)においても似た状況であると言っていいだろう。以上のことは、当段階者が、(先に「区別を明確化しつつある」とも記したとおり)その意識の持ちようにより、あるいは求められている発音の趣旨の受け止め方にもより、自身の発音をいわゆる“普段仕様”にも、それよりは少し区別を誇張した“回答仕様”にも発音する段階にさしかかっていることを思わせる。図3で比較的重なりが大きい領域はこのうちの前者、それよりは左右にずれて点在するものは後者のタイプを映したものと言えらるだろう。このことひとつをとっても、II - 2はII - 1とは性質を分かち変化段階にあるということが言える。

他方、/si/と/su/が明確に区別され、II - 1とは別段階にあることは、その口唇形状においてこそより検証的に言いうる。再掲の図6はその違いを棒状と楕円形状とで象徴的に示したものであるが、II - 1が非円唇ながら唇の横への開きと緊張を緩め、しかも/si/と/su/の違いが容易には視認できない口形(つまり楕円形状)を呈していたのに対し、当話者の場合、その/si/と/su/には逆に棒状と楕円形状とによる紛れのない形状の差が視認できる。つまりその口形は、各実際音を聞くまでも

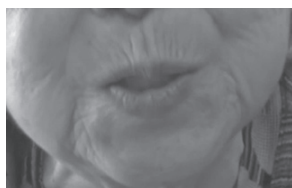
なく、当人においてこの2つが別の発音に認識されているであろうことを、また実際、各口形によって現れている実相もイ寄りとウ寄りとで異なるであろうことを容易にうかがわせるものとなっている。

しかしまた一方、口形その他にこのような差があるにも関わらず、舌調音を縦の関係で見ると、既述のとおりF1にも一定の分布幅があるとはいえ、多くは500Hz前後に現れ、少なくとも基準値のイヤウにまで寄って点在するものはないことが注意される。つまり当話者は、I - 1やII - 1の変化からは大きく衰退の方向へと傾いた段階者と見うるが、その実際は、とりわけ舌調音の面では、およそ横軸上の前後の関係においてのみ生じているものであったと把握することができる。

なお図3に記すF1・F2の各平均値であるが、先にも触れた“発音仕様(普段・回答)”の違いを考慮すれば、これまでの段階者とは少し意味合いが異なるものと見るのが適切なように思える。しかし図中にその値を置いてみると、/si/ /su/ともに比較的分布の重なる帯域に、つまりは当人の発音でもっとも頻度高く現れる帯域近くにそれが相当することとなり、平均値がそれなりに当段階者の発音の特質を反映していることをうかがわせる。以上は、発音に分散傾向があるとはいえ、それは強いて区別を意識すればそのようにも発音できるということであり、発音の主体はあくまで既述の“普段仕様”にあることを物語っている(よって平均値がおおよそ分布の重なり合う近くに現れる)と考えられる。なおそのことは、次のII - 3との対比でよりそうと理解できる。

3.4 II - 3

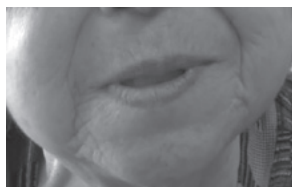
II - 3は、上記の枠組みでは「/si/がイ寄り・/su/がウ寄りの低母音：円唇」と説明される。つまりその限りでは、先のII - 2と舌調音の面で変わりがなく(口形の



口形 1-①



口形 2-①



口形 1-②



口形 2-②

みが円唇化), 実質 II - 2 の段階にある中のバリエーションの1つとも受け取れる。しかしそれを複数発音として見ると, まず舌調音が単に“変わりがない”とは特定できず, その現れ方の実状に異なる面がありそうなこと, また円唇の特徴もそれが当人に常時現れるものとは言いがたいという点で, 特定状況下での臨時的な実態であることが見て取れる。

ここでは, これまでとは順番を逆に, まずは口唇形状の方から先に見ることにしたい。

口形 1-①・2-①は, II - 3 の代表2名の「茄子」/nasu/ の口形を抽出したもので, いずれも大橋 (2021) に例示したものの再掲である。この2つを見るに, ミニマルペアの「梨」/nasi/ を引き合いに出すまでもなく, その形状は円唇とみとめるにふさわしい。まさに再掲の図6に見立てた円形状のモデルがこれに相当する。こうした口形が, これまでの段階者には (本稿のように複数発音を対象にした場合にも) みとめがたかったことからすれば, やはり II - 3 は, 他段階とは性格の異なる独自の1段階を示しているとまずは捉えることができる。しかし転じて口形 1-②・2-②を見ると, 今度は同じ話者

の同じ「茄子」/nasu/ の口形とは見がたいほどに唇のすぼめが弱く, 非円唇的であり, むしろ図6で示す楕円形状のそれに類するものとなっている。つまり現状, 1と2の話者は, /su/ を円唇状 (円形状) の①にも, 平唇状 (楕円形状) の②にも表出していることが見て取れるのである。前稿では複数ある発音の中の特徴的な1回を対象とする趣旨により, 円唇化という新しいフェーズを示す①が象徴的に取り上げられた経緯がある。しかし同話者の場合, 複数発音するには当然②もあり, 詳細に見比べればむしろその方を多とすることがうかがえる。これらからすると, 当該段階者は, II - 2 の段階者に準じることを基調としながらも, その中で /si/ と /su/ の区別をことさらに意識した場合には, またその各々を丁寧に言い分けることを志向した場合には, /su/ の口形を円唇状のものにも表出する段階にあると見るのが適切である。その点では, 1-①や2-①に見られる円唇の口形は当人の発話スタイルに依拠するところが大きく, よって上記するような“特定状況下での臨時的な実態”であるということが言える。

一方の舌調音であるが, こちらはその現れ方に関して, いくつか注意すべき点がある。以下に1・2の話者のF1-F2図を, それぞれ図4・図5として示す。

これらによると, 上記にはこの2話者を「II - 2 の段階者に準じる」とはしたものの, ・と×の分布からすれば, いずれも先のII - 2 (図3) に現れたものと近似する状況にあるとは言えない。具体的には分布の縦横への振れ幅が大きく, 調音の重なりもこれまでのものよりは広くばらけた感のあることが指摘できる。これは, おそらくは1・2の話者に調音の自由度が大きく, たとえば先のII - 2 の段階者がそうであったような, 基幹となる“普段仕様”等の調音の軸が定まっていなかったことに起因するのではないか。このことから, 発音を問われるごとに前後舌的であったり中舌的であったりが不規則的に (同時に低母音の度合いも変動させつつ) 現れ, またそうした

音節	発音数		平均	
			F1	F2
/si/	28	56	473	2316
/su/	28		486	1481

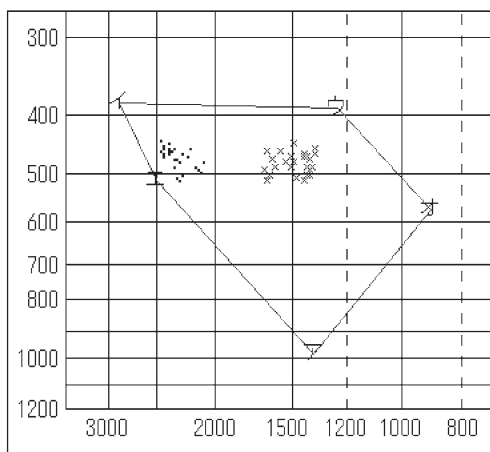


図4 II - 3①

音節	発音数		平均	
			F1	F2
/si/	28	56	481	2221
/su/	28		494	1592

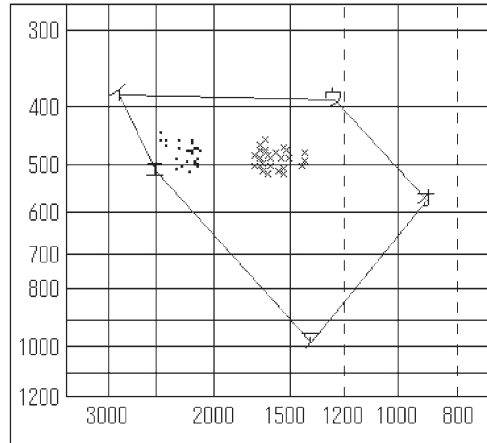


図5 II - 3②

中でも /si/ と /su/ の区別が問われると、俄然その違いを誇張してでも（その際には口形を円唇化させても）発音しようという、^{注10} きわめてフレキシブルな状況が観察されることになるのだと思われる。またそうであることで、各図に記す平均値もほとんど平均である意味や効力を発しておらず、先の II - 2 が振れ幅を示しながらも、平均的な特質をそれなりに反映していたのとは様相が異なることとなっている。これらを総合的に見ても、当 2 話者は、II - 2 の段階者とは連なりつつ、それとはやはり一線が画される段階にあると捉えることが妥当のように思われる。

また、ここで注意されることのもうひとつは、このようにも調音の自由度が高く、フレキシブルな、そして口唇を円唇状にも表しうる段階者でありながら、図 4・図 5 からは F1 の分布を上方にシフトしていくような動きが未だみとめがたいことである。これは既に前節(3.3: II - 2 の段階者)でも触れたことであるが、高年層で序列最下位にある II - 3、すなわち舌調音において「分布の振れ幅が大きく」、/su/ の口形を「円唇状のものにも表しうる」1・2 の話者においてさえも、その F1 値は基準値のイヤウとはかなりかけ離れた位置に現れているということである。しかも特定の 1 回の発音を捉えて言うのならまだしも、ここでは 50 を超える複数の発音を対象にしても 450Hz 辺りから上方に現れるものがほとんどない。このことから、当現象の衰退過程、言い換えれば舌調音を基準値近くに寄せていく共通語化の道筋にとって、/si/ と /su/ が“一律に高母音化する”ことは、従来中心的に観察されてきた“中舌音が前・後舌に引き分かれて区別を明確化していく”こと以上に、大きな壁となっていることがうかがえる。

また一方、上記のいくつか注意されることに付け加えて、さらに指摘しておきたい点がある。それは、上に

II - 3 として一括した 1 と 2 の話者においてさえもなお、細かいところで相違があるように見えることである。既見のとおり、この 2 話者は確かに「分布の縦横への振れ幅が大きい」点、結果「調音の重なりもこれまでのものよりは広くばらけた感のある」点、さらに「前・後舌的であったり中舌的であったりが不規則的に」現れ、またそうした中でも「/si/ と /su/ の区別が問われると、その違いを誇張してでも（その際には口形を円唇化させても）発音しよう」点では確実に性格を一にする。しかしその“振れ幅”や“広くばらけた感”の実際を対照すると、1 の話者がどちらかといえば上記でいう“前・後舌的”な領域に多く現れているのに引きかえ、2 の話者はそれよりも内側に寄った“中舌的”な領域に優位に分布しているように見える。つまりその振れ幅やばらけの実体は、1 がより標準的な発音を志向する中での現れである一方、2 の方はむしろ方言的な発音を基調とする中での現れと解され、同じく自由度の高い状況ながら、実状の異なる変化の段階差があることがうかがえるのである。特に 2 の話者に関しては、変化の枠組みのうえでは 1 と類同するが、主体となって現れる発音が内寄りであるという点では前段階の II - 2 に近いということが言えるだろう。またこうした状況を踏まえるならば、II - 3 をさらに細密に見ていくと、先にはみとめがたかった高母音化の端緒に当たるものなども含め、類似しながらもさらに性格を異にする多様な変化段階が抽出・分類されることを想像させるものであるとも言える。

4. 複数発音から把握される現状の特質

以上、3.1～3.4 節にかけて、大橋(2020)で整理した変化段階の枠組みを援用しつつ、その各々に該当する代表 5 名の複数発音の実態を対比的に見てきた。そ

の結果、序列の最上位で/si/と/su/を区別しないI-1と、その次段階で区別を獲得しつつある（しかしその各実相が中舌的で近似する）II-1に関しては、それを複数発音として見た場合にも、各枠組みで規定される特質とほとんど変わらない一定的な状況を呈する段階にあることが把握された（ただしII-1は、区別を獲得する過程の初期段階に当たるためか、特に/si/と/su/が連続する音環境において両音が時折反転する状況が確認された）。一方でII-2は、その枠組みで特徴とされる調音（/si/がイ寄り・/su/がウ寄りの低母音）をなぞらえながらも、平均的な“普段仕様”の発音に対し、それよりは少し区別を誇張した“回答仕様”の発音にも現れうることで、調音の分布に部分的なばらつきが見られ、発音ごとのバリエーションが一定数あることが把握された。また、それがさらにII-3になると、II-2でいう分布のばらつきや発音のバリエーションは一層大きく、それに応じて口唇形状も基本の非円唇に加え、区別の意識が強く働けば円唇状にも現れうる段階にあることが把握された。また以上のことから、各図に記すF1・F2の各平均値も、I-1とII-1、あるいはII-2をも含めておおよそその段階者の平均的特質を表している（よってそこから当人の発音の出方を予測しうる）と考えられるのに対し、II-3は何をもってこの段階者の特質と見るかが容易には特定しがたいことが把握された。

さらにこのII-3は、前稿の「枠組み」でこそ舌調音の特質がII-2と重なり、関連しているようにも見えるが、それを複数発音として見た場合には、上記するようにならずに異質であること、そればかりか同じII-3の段階者の間にも細かい点で相違があるように見えることが注意される。具体的には、当段階者に見られる発音のばらつき等の実体が、標準的な発音を志向する中での現れなのか、方言的な発音を基調とする中での現れなのかの相違である。先の分析（図4・図5）ではそれぞれの分布密度から、①の話者がどちらかといえば前者、②の話者が後者に基づいていることがうかがえた。このことは、特にII-3と見なすものの現状や特質を特定するうえで、これまでよりも注意深く、たとえば本稿のような複数発音を見比べるような視点からその実状を把握する段階が求められることを示唆している。

加えてもう一点、当分析の全体を通して特筆しておくべきことがある。それは、各段階者につき本稿では50前後の複数発音を対象にしていながら、F1値が450Hz辺りから上方に現れるものがほとんどないこと、つまりI-1やII-1はもとより、変化序列でもっとも先行しているII-3でさえ基準値のイウからは遠く、未だ低母音であることである。そこに一定の傾向がありそうなことは、前稿では複数話者を調査することで、そしてそ

の各調音を構造的に分析することで認識されることとなったが、以上は、本稿のような複数発音のアプローチを志向してこそより明示的に把握される特質であると言える。

5. 当分析から得られた知見と今後の展望

「はじめに」にも述べたとおり、本稿は衰退過程にある北奥方言の狭母音音節の諸相、その現状が意味することについて、既調査による変化段階の枠組みを援用しつつ、その高年話者における複数発音の実相を比較することで明らかにしようとした。その結果、各変化段階に応じた実相の現れ方があること、たとえば複数の発音でも各々が類似した一定の相に現れるもの、発音ごとに分散して現れるもの、その分散の中にも発話スタイル等の背景がうかがえるものと、そうではない不規則的なものがあること、さらにはそうした序列の異なる者どうしでも低母音化という共通の方言的特色は堅持されていることなど、複雑な現状に対し、特に複数発音という視点で実態を捉えることで見えてくる新しい知見が付け加えられることになった。以上のことは、当方言の現状が、多様な要素・事情・背景等により現れているものからその一端を抜き出し、それぞれを横並びにして見るだけでは実質的な意味を測りがたい状況にあることを物語っている。逆に言えば、その現状を適切に捉えるためには、実態をまず大きく性質分けしたり、その中を細分化したり、それらを多角的に分析したりと、この現象と向き合うにあたり、相応の切り口や段取りを用意することが求められる段階にあることを物語っている。その点では、これも「はじめに」に言及したことではあるが、本稿の取り組みは現状の把握とそれが示す意味の理解が第一義でありつつ、その実際は“収集データの捉え方、またはその分析手順に関する新しい試み”であったということが言える。

また以上のようなのであれば、本稿で試行した切り口や段取りも、現段階では文字通り収集データをどう整理して見るかの“試み”にとどまっており、この見方で十分であるとはもちろん言えない。たとえば本稿では、大橋(2020)における「変化段階の枠組」を援用してそれぞれの複数発音を見たが、特にII-3に分類されるようなものは必ずしも同類であるとはいえず、調音・口形ともに、その現れ方という点では「枠組」が示す説明の限りではないことが見て取れた。発音の仕様やスタイルなども深く関わりそうなIIの段階者に関しては、本稿での究明点との対照により、今後は前稿の枠組みをさらに細分化して実態を見ることが必要になると思われる。また上記でいう各段階者の“要素・事情・背景等”との関

わりからすれば、本稿（および前稿）では対象から外した I - 2 のような話者、つまり発音の区別は明瞭ながら、自らの誤った知識で「/si/ /su/ とともにウ寄りの低母音」に現われるような話者も、^{注11} 当方言の現状の一端を示す段階者として何らか関連づけをする必要があるかもしれない。^{注12} 加えて、当方言の舌調音の特質として何度か言及した「未だ低母音」という状況の次段階の変化を探るうえで、本稿で得た知見に基づき、さらにこれよりは若い世代の動態を見ることが必須になるだろう。いずれも発展的な展望であり、今後の課題としたい。

注

- よって本稿でも /-i/ /-u/ のうち、/si/ /su/ を対象に分析を行う。大橋（2020）に即した考察であることが直接の理由だが、前稿で /si/ /su/ を限定としたのは、本調査においてデータが過不足なく揃っているのが当該音節であったこと、/ci/・/cu/、/zi/・/zu/ では有声化や鼻音化といったまた別の発音要素との関連を考慮する必要があったことなどによる。
- 調査については大橋（2020）に詳しく述べているので、ここでは要点のみを記す。話者は、2017年6月～2019年11月に秋田県5地点で行った高年女性22名が対象である。平均年齢は76.8歳（調査時点）。1名（男鹿市→秋田市）を除き、他所で過ごしたことがないか、移動がある場合も同一地区内にとどまる。調査は共通の質問調査票（音声・文法・アクセント）を用い、音声だけでも複数の項目を扱っているが、本稿では本論で記す /si/ /su/ のミニマルペア7語（四・酢、梨・茄子、獅子・寿司・煤）を対象に分析する。
- 調査は謎々式により、1語をまずは2～3回ずつ発音していただき、その後、たとえば「梨と茄子が似た発音になることはないか」を尋ね、その内省を踏まえて各ペア語をさらに複数回発音していただく形をとった。大橋（2020）では、そのうちのどれか1つを対象に据え分析を行っているが、実際には最終回のそれを基本としつつ、発音状況に応じて初回または中途段階を探ることもあった。その手法によった理由は大橋（2020）に詳述しているが、このこと（どの1回を対象に据えるかの選定に課題があること）は、本稿が前稿をもとに、複数の発音を問題にしようとするに至った所以でもある。
- 音響・口形分析は、分析ソフトの Praat および Video Studio により行う。音響分析では Praat の Edit 画面でスペクトログラムとフォルマントを重ね合わせて表示し、/si/ と /su/ の調音区間を確定した上で、母音部分の F1・F2 を抽出するようにした。口形分析では発音動画から一連の口唇の動きを分割し、視認と発音秒数との対照から、/si/ と /su/ に該当すると見込まれる箇所をそれとみとめて画像を抽出した。
- その意味では、「/si/ と /su/ の区別が明瞭である」時点で、当話者の示す実相は「/si/ と /su/ を区別しない」I の段

階には相当しないと言える。

- 東北地方をはじめ東日本の /u/ が非円唇母音になりがちであることは、従来より、主には西日本（円唇母音）との対比において概説的に知らされてきた。しかし、久野（2005）が「唇の丸めがどの程度あれば円唇母音とするのかについて基準がない」（p.559）と指摘するように、これまで、この点から客観的アプローチを志向して捉えるものがなかった。本稿はこれを主題とするものではないが、再掲の図6からもイメージされたとおり、当方言の現状には、同じく非円唇と括られるものの中にも唇の引きや緊張の度合いに応じて段階差があることがわかる。
- F1-F2 図の作成には、大橋（2020）ほかとの比較を考慮しつつ、今石（1997）および今石ほか（1984）を土台に、作図が可能な「F1F2 Projecter」（河内秀樹氏作成）を使用した。
- 今石ほか（1984）に「舌と口蓋によって作られる狭めの位置を横軸とし、唇部の開き具合を縦軸とした口腔内の調音点と、この「F1-F2 図」が比較的良く対応」（p.89）するとの記述がある。
- これに類する実相段階を示すものとして、新潟県北部（大橋 2007）や岩手県中北部（大橋 2002）の例があげられる。ただしそれらは中間相で合一化するものであり、当話者は確かに非合一の様相を示している点で、それらよりも少し変化の進んだ段階にあると言える（それゆえ、ここでは変化段階を II としているが、より調査を深めれば、当方言の現状にも大橋 2007・2002 に見られるような非合一のものが I のバリエーションとして抽出されうるかもしれない）。
- この円唇と非円唇とに現れる口形であるが、舌調音との対応で見ると、/su/ がもっとも後舌寄りとなることが必ずしも円唇化の絶対条件とはなっていない。確かに円唇に現れてことさらに中舌寄りとなることはないが、一方で非円唇と比べてことさらに後舌寄りとなるわけでもない（むしろ非円唇の方が後舌寄りとなる場合さえある）。この事実を踏まえ、大橋（2020）では、当該段階者の円唇母音が疑似的なものであること、逆に言えばそのように疑似的に繕った円唇の口形は、外形上はそれらしく現れても、舌調音のあり方そのものには直接影響しないことの表れでもあると解した。
- これは同方言の男性話者や他方言話者の実態からすると一定数いると思われる。
- 注5に記したような観点に従えば、それはむしろ II - 3 の枠組みで、またその中でもより変化の進んだ段階と捉えるのが適切であると思われる。

参考文献

- 秋田県教育委員会編（2000）『秋田のことば』無明舎出版
 今石元久ほか（1984）『日本語音声のスペクトル分析資料集』
 文部省科学研究費特定研究「言語の標準化」資料
 今石元久（1997）『日本語音声の実験的研究』和泉書院
 大橋純一（2002）『東北方言音声の研究』おうふう
 大橋純一（2007）「言語接触地域における /-i/ /-u/ の実相と

- 分布—新潟県北部方言の場合—」今石元久編『音声言語研究のパラダイム』和泉書院
- 大橋純一 (2017) 「残存する方言音声の質的バリエーション—典型から知識レベルの実相まで—」『秋田大学教育文化学部研究紀要 人文科学・社会科学』72
- 大橋純一 (2020) 「北奥方言に見られる狭母音音節の諸相—調音・口形の構造的分析—」『国語学研究』59
- 加藤正信 (1975) 「方言の音声とアクセント」大石初太郎・上村幸雄編『方言と標準語—日本語方言学概説—』筑

摩書房

- 久野真 (2005) 「日本語音声のバリエーション—方言研究の視点—」『日本音響学会誌』61-9
- 佐藤総 (1984) 「秋田県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学4 北海道・東北地方の方言』国書刊行会

付記

本研究は JSPS 科研費 JP18K00602 の助成を受けている。